

画像・病理
レポート

診療グループで見落とし防止

患者説明まで確認

旭医大病院が システム開発 電子カルテ依存せず

旭医大病院(古川博之院長・602床)の医療安全管理部と経営企画部は、電子カルテに依存しない独立型の重要診療情報伝達漏れ防止システムを医用工学研究所(三重県)と共同開発し、院内運用を開始した。医師が画像・病理検査結果などを確認して患者へ説明したかどうかを診療グループ全体で監視でき、検査結果が未確認だったり患者に結果が説明されていなかったりした場合は注意を促すことができる実効性あるシステムだ。



患者個人の電子カルテを開かなくても、ログイン画面にアクセスすると診療グループ全体の通知が一覧表示され、未読や未説明が一目で分かる

画像・病理所見などの見落としに起因した医療事故は全国的な問題となっており、日本医療安全調査機構が昨年4月に提言「救急医療における画像診断に係る死亡事例の分析」を公表、厚生労働省も昨年末に画像診断報告書等の組織的な伝達・確認体制構築を求める事務連絡を发出している。

「紙カルテや画像がフィルムだった時代は存在しなかった問題であり、電子カルテの盲点。問題の表面化まで誰も気づいておらず、ニュースを見て他人事ではないと危機感を持った」と、林達哉医療安全管理部副部長(頭頸部癌先端的診断・治療学講座特任教授兼耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座准教授)は開発の経緯を説明する。

3年以上前から準備を進めており、5年間の全例調査では20例程度の説明遅れが確認されたが、全国で報告が相次いでいる死亡に至るような重大な事例はなかった。

従来システムは監視対象が単一だったり、電子カルテシステムの一部として機能が大きく制限されていたりするのが課題だった。開発したシステムは、通知システムをアドオンのように新たに導入することでこれまでの不備を解消した。特定の電子カルテメーカーに依存することなく、どの施設でも導入可能だ。

読影医や病理医のレポートを未読か既読か、患者に未説明か説明済みかを、患者の電子カルテを開かなくても診療グループ全員が一目で確認できるようにしたのも特長。医師一人一人の負担と責任をグループで分け合い、医師が頻繁に入れ替わる大学病院の特性を踏まえ、最終的には病棟・外来医長等の責任者がチェックして「承認」する仕組みだ。

未読等の通知は、医師ごと、放置期間順、重要マーク付きなどの項目別にソート可能。未読や未読だけで全てカバーできないだけでなく、運用で解決の多くは、実際にはスリーパス変更を忘れていた例がほとんどだが、責任者は放置期間の長い通知について担当医に注意を促し、異動医師の分は責任者が処理する。

林副部長の専門である耳鼻咽喉科・頭頸部外科で試験運用後、昨年12月から全科での運用を開始した。「一度もレポートが読まれない事態を必ずどこかで防ぐ。システムだけで全てカバーできないので、運用で解決しなければならぬ部分は残る」として、運用状況を確認しながら改善していく。重要マークの付いた未読・未説明などの放置期間や件数等の統計データは、院内の注意喚起資料に活用している。